1959年1月31日第3種郵便物認可（月615円郵便160円、会員は会費に含む）

週刊 うたごえ新聞

5／10・17（合併号）（2004年）NO. 1930

THE SINGING VOICE OF JAPAN (UTAGOE)
日本のうたごえ全国協議会機関紙
うたごえ新聞社
〒169-0072 東京都新宿区大久保2-16-36
☎03(3209)0638 FAX03(3200)0105
E-Mail:journal@utagoe.gr.jp
http://www.utagoe.gr.jp/journal/
振替口座 00120-6-5631 毎週月曜日発行

〝平和〟〝共存〟は最も有効な戦略

作家 池澤夏樹氏に聞く

イラク 憲法 沖縄

編集長 三輪純永の 今月のときめきインタビュー

芥川賞作家、沖縄知念村在住の作家・池澤夏樹さん。小説と同時に「新世紀へようこそ」と題して9・11以降、世界の動き、イラク戦争、自衛隊派兵、憲法などコラムをメールで発信し、一昨年9月、イラクに行き、米英のイラク攻撃の愚かさを緊急出版「イラクの小さな橋を渡って」で伝えるなど精力的な活動を展開している。沖縄に住んで10年、「沖縄にいるからこそ見えるもの」を、米国や日本政府に突きつけてきた。池澤さんの捉える日本の今を聞くべく、知念村を訪れた。今号より連載で紹介（3月18日、知念村・サンライズホテル）

▲沖縄南部の海をながめながら自宅近く知念村のホテルで

池澤夏樹プロフィール

1945年、北海道帯広市生まれ。68年、埼玉大学理工学部物理学科中退。75年から3年ギリシャに暮らす。87年、「スティル・ライフ」で第98回芥川賞受賞。以来2003年司馬遼太郎賞受賞まで数々の文学賞受賞。サイト www.impala.jp

三輪 精力的に発信される鋭い指摘、きょうは直接うかがいたいとお時間をとっていただきました。よろしくお願いします。

先生は、うちの新聞で毎週連載のエッセー「空を見てますか」を書いて頂いている池辺晋一郎先生とは30年来のおつきあい、「空を…」は本になりましたが、その4巻目には先生の「30年来の友人がこんなにエッセーのうまい男とは知らなかった…」と推薦文もあります。

♥♥合唱曲共作以来の親友・池辺晋一郎

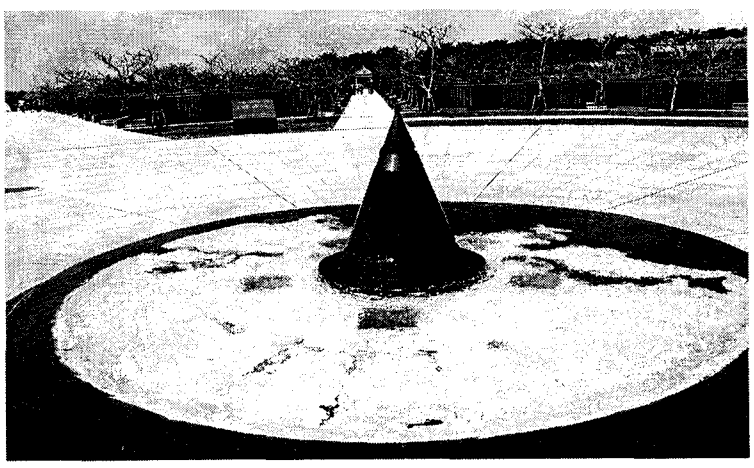
池澤 そう、ちょうど出会って30年ですね。NHKの委嘱作品で「恩愛の輪」という合唱組曲を一緒に作ったのが最初です。彼は当時作曲界の新進のスターでね。作曲は彼に決まっていて、詞の方は最初に決まっていた書き手に逃げられたのかな、それで僕にやらせてみたらと紹介する人がいて回ってきたんです。彼とは歳も同じくらいだし、とても気があって以来のつきあいです。

僕は詩は書いてたけど詞は初めてでした。でも、日本では目で読む詩が主流だったけれど、僕は耳できいてもわかる、つまり、読んだ時、どの漢字を使っているかがわかる詩という意識があったので詞には移行しやすかったんでしょうね。

以来、彼と合唱曲も7つ8つ、もっと作ったかなぁ。一緒にいろいろなことやって…、20年近く前にはJOBKで芸術祭用に「オイディプス遍歴」というオイディプスの話を義太夫・豊竹咲太夫と小さなアンサンブルでやったりして遊びました。

しかし、僕も忙しくしているけれど、彼もよくまあ各地に出かけてますねぇ。僕と同じくらいマイレージが貯まってるんじゃないの。そのなかでエッセーも10年ですか、すごいね。

（6、7面につづく）



▲摩文仁・平和祈念公園の〝平和の礎〟を背に、中心点沖縄・〝平和の火〟から世界に平和の波を発信する

04.5月合併号

ず～む「悪魔の飽食」沖縄公演、絹の道合唱団演奏会 3面
2004日本のうたごえ祭典inおきなわへ 4、5面／「紫金草物語」第4次中国公演 9面
〈連載〉ミュージック・トゥデイ（日下部吉彦）「芸能マンスリー」（伊藤強）「われらニャがの合唱ニャン」、和太鼓らいふ、試聴室
楽譜紹介「風よわきおこれ」／2004教育講習会案内／仙台合唱団演奏会、新潟・雪ん子 10面
若者平和行進 対談／「空を見てますか」池辺晋一郎 12面

※次号の本局発送は5月14日です

ふめんだい

「自己責任論」が飛び交っている。「自己責任」自体は大事なことだが、それがどこにつながられるかで意味が違ってくる。今回の、イラクで拘束された人たちに対し、危険を顧みないで行き、救出に税金を使ったのだから費用の一部自己負担は「自己責任」だと言う。

☆ ★ ☆

なぜ彼らが行ったのか、拘束されたのか。自己責任と言うならそこから始めなければいけない。彼らの活動は自衛隊にも、国にもできないものだ。憲法が保障する、個人の責任と国の責任をまったく混同している。

☆ ★ ☆

が、この事態に「世論」が問われる。3人の拘束のニュースが伝わった数日は、その元凶の一つ、自衛隊の即時撤退の世論が強かったが、それが日ごとに弱まり、出てきたのが自己責任論。ついには彼らを「反日分子」など時代錯誤な発言を国会議員が国会でする。

☆ ★ ☆

この政府を許すのか、正すのか、世論はその鍵を握っている。前号で笠木透さんが紹介した家畜論―日本人は与えられるえさに安住する家畜にされている―に身を委ねていると、政府の暴走を応援することになり、憲法は空文化していく。（純）